



「Aものづくり」の単元開発【第5学年】

教員が知らない視点も

茶葉に梅の加工食品を加えて販売する場合には、食品衛生法の表示義務が生じることなど、教員が知らない点まで教えていただき、授業に生かしました。

本物に触れる体験

授業パートナーと直接交流の場を設けました。児童の興味・関心が一気に高まりました。

創造と探究につながる視点づくり

いきなり製品の開発は難しいですが、児童と教員が開発のための知識や視点を獲得することが必要だと感じました。

開発中に立ち戻れるコンセプトに

要素を多めに詰め込んだコンセプトとなりましたが、その分、ものづくりの過程で「これじゃだめだ」と軌道修正に役立ちました。

進捗状況の報告

放課後に代表児童2名と共に蒲南茶荘様へ出掛けました。動画でその様子を後日他の児童にも見せました。

学級を工場に見立てる

製品部門ごとに活動しました。アイデア出しはグループごととし、スライドにまとめたものを全体検討する場を設けました。

お茶のプロの視点×梅のプロの視点×消費者のプロの視点

味のデザインには、より多くの視点からフィードバックをいただきました。味の決定に役立つだけでなく、自信をもってものづくりを進める力になりました。

活動途中に振り返る価値

製品開発の過程では「本当にできるのだろうか」と自信がなくなる局面もありました。活動途中に授業パートナーに進捗報告をしたり、自分たちの学習を振り返ったりする機会をこまめにとることで、少しずつ前進することができました。教員も、見通しをもてない部分を少しずつ切り拓いていきました。

商品という形になる喜び

実際に販売できる商品が完成した！それだけで子どもたちは大興奮です。さらに、学校公開時に販売に携わることで、物流、お金についても体験的に学ぶことができました。正に、世の中に生きた学習です。

事前の打合せ

蒲南茶荘の鈴木様と打ち合わせしました。商品化する上で考慮しなければならない点を確認し、販売のためには選択肢が限られる部分と、児童のアイデアを生かせる部分があることが分かりました。

知る、体験する活動①

蒲南茶荘を見学させていただき、茶やお茶屋に関することを教えていただきました。

知る、体験する活動②

蒲南茶荘の鈴木様の御協力の下、利き茶や飲み比べを通して、温度や茶葉による味の違いを確認する体験を行いました。茶葉にどんな種類があるのかなど、これから製品を開発に生かせる知識や視点を獲得することができました。

依頼を受ける⇒コンセプトの設定

「東蒲小のオリジナルブレンド茶をつくる」という方向性までは、依頼を受けた時点で決定させておき、児童には「●●●なお茶をつくらう」の●●●の部分を考えさせました。「梅がほんのりすっぱくてお茶の旨味が絡み合った大人も子どもも飲んで元気になるおいしいお茶をつくらう」というコンセプトを決めました。

コンセプトに対するフィードバック

つくったコンセプトを授業パートナーの皆様に見せて励ましや御意見をいただきました。やってみないと見えてこない部分があることも含めて前向きに応援していただきました。

もち味を生かした役割分担によるデザイン

学級全体を「とうめ茶工場」と名付け、パッケージ部門、味部門、CMソング部門、広告部門、企画部門、入れ物部門、価格部門、売り場部門、ちらし部門の各部門に分かれてアイデア出しを行い、全員で話し合って決めたいことは「全部門会議」と名付けた学級会で決めました。

デザインに対するフィードバック

つくったデザインを蒲南茶荘の鈴木様に聞いていただき、「実現困難か」、「他の選択肢はあるか」などの御意見をうかがいました。

さらに、和歌山県みなべ町うめ課の平様と下浦様に梅農家の立場から、学校公開時に保護者の皆様に消費者の視点から、それぞれ試作品を試飲していただき、御意見を収集しました。

活動途中に振り返る時間を設けたクリエーション

活動の途中に、今日の学習で「自分ができたこと」や「友達のよかった点」、「自分たちの部門に勢いはあったか」など、自分や他者のよさやもち味を認め合うための様々な視点から活動を振り返らせました。

クリエーションに対するフィードバック

クリエーションでつくった成果物を蒲南茶荘の鈴木様に見ていただき励ましや御意見をいただきました。

完成品を販売

出来上がった茶を学校公開時に校内で販売したり、蒲南茶荘に置かせていただいたりして販売しました。



コンセプト



デザイン



クリエーション



「B地域の創生」の単元開発【第6学年】

事前の打合せ

大森麦わら細工の会の藤塚様と大田区立郷土博物館の小室様と打ち合わせしました。児童が体験する前に、教員が貼り細工を体験させていただきました。

知る、体験する活動①

児童と教員が、旧キネマ通り商店街を散策し、蒲田図書館で開催された回顧展を訪れました。地域を実際に歩いて感じた体験を通して、「地域を活性化させたい」という思いをもちやすくなりました。

知る、体験する活動②

大森麦わら細工の会の藤塚様と大田区立郷土博物館の小室様から、大森麦わら細工の歴史や作り方を教えていただき、実際に児童が作品を制作しました。

依頼を受ける⇒コンセプトの設定

キネマ通り商店街元会長の柳町様には旧キネマ通り商店街の活性化の願い、大森麦わら細工の会の藤塚様には伝統継承の思いをそれぞれ語っていただきました。それらの依頼を受けて、「大森麦わら細工で旧キネマ通り商店街を元気にしよう」という内容の学年全体のコンセプトを設定し、活動を方向付けました。その後、商店ごとに異なるニーズに応えるために、3つのグループごとにコンセプトを設定しました。

コンセプトに対するフィードバック

設定したコンセプトを授業パートナーの皆様に見ていただき、励ましや御意見をいただきました。

もち味を生かした役割分担によるデザイン

児童をグループに分け、さらに、グループ内でも役割分担をさせることで、一人一人のもち味を生かせる場を用意しました。

デザインに対するフィードバック

つくったデザインを授業パートナーの皆様に見ていただき、励ましや御意見をいただきました。

活動途中に振り返る時間を設けたクリエーション

デザインの段階と同様に、役割分担を行い、もち味を生かせるようにしました。加えて、活動の途中に、活動を振り返る時間を設けることで、自分や他者のよさやもち味を認め合うようにし、もち味を生かして挑戦できるようにしました。

クリエーションに対するフィードバック

クリエーションでつくった成果物を授業パートナーの皆様に見せて励ましや御意見をいただきました。授業パートナーである商店街の皆様と地域のこどもたちが、共に東蒲田の地域創生を願いました。

完成品を通して地域に発信

麦を水につけて柔らかくし、アイロンをかけて光沢を出し、ボードに張り付けて出来上がった麦わら細工を商店に置かせていただき、地域の創生への願いを込めて発信しました。

教員も体験させていただきました

教員が麦わら細工の魅力を感じることで、単元開発のイメージが豊かになりました。

問題意識につながる体験活動

授業パートナーからの依頼を受ける前に、問題意識につながる体験活動をしました。

興味・関心につながる体験活動

長期間に及ぶ創造と探究には、意欲を継続させる面白さや魅力が必要だと考えました。授業パートナーからの依頼を受ける前に、児童自身が面白さや魅力に触れる体験の機会を設けました。

相手意識を重視した大小2つのコンセプト

学年全体のコンセプトとグループごとのコンセプトの2つを立てました。活動の方向性を統一するために学年で大きなコンセプトを立て、ニーズの異なる店舗ごとにグループコンセプトを立てたことで、相手意識を大切にしたいコンセプトを追究しました。

コンセプト、デザイン、クリエーションそれぞれの区切りごとに

授業パートナーに進捗状況を報告し、励ましや助言をいただきました。

役割分担によってもち味を生かす

図案を考えることが得意な児童や、歴史への興味が高い児童など、それぞれのもち味によって役割分担をしながらグループ活動を行うことで、児童がもち味を生かした挑戦をできる場を用意しました。

活動途中の振り返る活動で

もち味を認め合う
活動終了後だけでなく、活動途中に自分や他者のよさやもち味を認め合う時間を設けることで、自分のよさやもち味を自覚したり、軌道修正したりできるようにしました。

複数の授業パートナーとの連携によって得られた視点

地域住民の一員であり、商店の事業主でもある旧キネマ通り商店街の皆様から、地域活性化への願いや、商店を訪れる客のことを考えた御意見をいただきました。大森麦わら細工の会や大田区立郷土博物館の皆様からは、歴史的な背景や、伝統継承の願いを踏まえた御意見をいただきました。おたの未来づくりの学習は、答えの無い課題に挑戦するので、活動の自由度が高い面白さを感じる前に、活動の方針が立たずに迷う可能性もある学習です。複数の授業パートナーと連携した本実践では、様々な視点からの励ましや助言をいただくことができ、そうした迷走が起きることなく、実践することができました。



創造的な資質・能力の素地の育成

【第1学年～第4学年、専科(次のページ)】

第1学年 生活科

秋となかよし

令和6年9月25日(水) 授業者:福岡 悠花 【1年2組】
秋の自然物に触れることで様々な発見をし、秋のおもちゃを作る見通しをもち秋を楽しむことができる。



本時のめあては遊びを見付けること



「はさみは使わない」などの約束確認



使いたい物を選択できる場の工夫



児童は試行錯誤、教員は評価と個別支援

目標の明確化
素地の育成をねらっていますが、本時のめあては生活科の目標です。

試行錯誤の条件を整える
効果的な試行錯誤をさせるために、条件を整えました。

試行錯誤の環境を整える
試行錯誤が生まれやすい場を整えました。

個別最適な学び
教員は、評価をしながら児童の様子を見取り、個別支援を行いました。



考えの交流、友達が考えた遊びの試行



「できタネ」」「いいね」で振り返り

授業者自評

■単元の最後だけでなく、単元の途中にも振り返る活動を取り入れることで、児童自身が自らの学習状況を把握することができるようになった。■個の学びと集団での学びを往還することで、児童が自他のよさやもち味に気付けるようにした。

参観者からの意見

■前時までの学習を児童の言葉で振り返ることで意欲につながっていた。■書字に抵抗感がある児童にも自己評価ができる振り返りシートだった。■他学年で実践する場合には、完成形の紹介のみではなく、失敗や過程の紹介もあるとよい。

指導講評 大田区教育委員会事務局指導課 指導主事 江袋 勇樹 様

■授業後の児童の姿を想像し、学習の最終形態を児童も教員も理解していることが重要である。■キャラクターを活用した視覚的な振り返りは児童に有効だった。どこがよかったか、もう少しだったかを教員が整理して言語化できるとよい。

協働的な学び
児童同士が互いのよさやもち味を認め合うための時間を設けました。

振り返りの充実
目指すことも像を意識し、キャラクターを活用して振り返らせました。

第2学年 生活科

世界で一つ 私のおもちゃ

令和6年9月11日(水) 授業者:小早川 湧万 【2年2組】
・身近な素材に触り、素材の特徴や面白さに気付くことができる。
・話し合いを通して、自分と他者の互いを認め合うことができる。



めあては動くおもちゃを考えること



切る、貼るなどの「作る」は次時に



遊びながら発想できる場の工夫



他者のよさやもち味を認め合う時間

目標の明確化
素地の育成をねらっていますが、本時のめあては生活科の目標です。

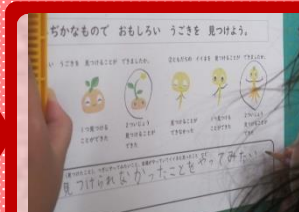
試行錯誤の条件を整える
児童が効果的な試行錯誤をするために、条件を整えました。

試行錯誤の環境を整える
試行錯誤が生まれやすい場を整えました。

個の学びを全体に広げる
教員は、途中で活動を止めさせ、他の児童の考えを知る時間を設けました。



ペアやグループでの試行錯誤



研究キャラクターを生かした振り返り

授業者自評

■素材の動きを試して遊べる活動時間を十分に確保し、素材の面白さに気付かせることで、児童が自分のもち味を生かして挑戦できるようになった。■自分と友達の二視点から振り返らせることで、友達のよさや自分の学びを実感できるようにした。

参観者からの意見

■試行錯誤に夢中になれる場だった。■意図的に伝え合う時間を設定するより、自然発生的に話し合う方が価値が高い場合がある。■でも、意図的に言語化させることも大切。■友達同士の紹介を受け、もう一回試す時間を設定してもよい。

指導講評 大田区教育委員会事務局指導課 指導主事 原口 慧史 様

■中間評価は、学習の方向性を整え、児童自身が獲得できたと自覚できるので、意義が大きい。何がよいのかを具体的に伝えたい。■振り返る活動の前、本時のめあてを確認するとよい。■ICTの活用は保存と共有に価値が大きい。

協働的な学び
児童同士が協力して考えられるよう、ペアやグループで活動させました。

振り返りの充実
研究キャラクターを活用してきたことを3段階で振り返らせました。



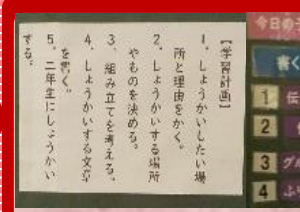
第3学年 国語科

わたしの町のよいところ

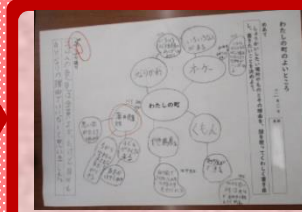
令和6年12月11日(水) 授業者:林 蓉子 【3年1組】
紹介したい場所やものを決めるために、図を用いてその理由を詳しく書き出し、友達と意見交流をして、書きたいことを決めることができる。



多様な考えから根拠をもって選択



学習計画や学び方の見通しをもたせる



思考ツールを活用したワークシート



児童は試行錯誤、教員は評価と軌道修正

児童が自己選択・自己決定
多様な考えをもち、選択し、自己決定することができる学習にしました。

掲示物の工夫
主体的に問題を解決できるように、試行錯誤の目的や方法を明示しました。

試行錯誤のための思考ツール
試行錯誤しやすいウエビングマップを活用しました。

試行錯誤を支える軌道修正
教員は、児童の様子を見取り、軌道修正が必要なグループには問い掛けました。



考えやその根拠を認め合う時間



自己評価と教員による評価

協働的な学び
考えを広く認め合うことで、その後の自己決定の自信につながるようにしました。

振り返りの充実
言葉で振り返らせ、本時の学習を価値付けました。

授業者自評

■書く意欲が高く、じっくりと書きたい児童が多い実態に合わせ、試行錯誤の時間を15分間設定した。■書く時間の途中で相談し合える時間を設定したり、自分の班との交流後に他の班とも交流したりするなど、協働的な学びは更に工夫できそうだった。

参観者からの意見

■試行錯誤に夢中になれる場だった。■意図的に伝え合う時間を設定するより、自然発生的に話し合う方が価値が高い場合がある。■でも、意図的に言語化させることも大切。■友達同士の紹介を受け、もう一回試す時間を設定してもよい。

指導講評 大田区教育委員会事務局指導課 指導主事 遠藤 健太 様

■目的に合致した適切な思考ツールを活用することが大切である。■試行錯誤の時間の15分を7分と8分に分けて中間評価をすることも有効である。■思考力、判断力、表現力等を養う時間に、主体的に学習に取り組む態度の素地を養うと、二兎を追うことになるので、より適時に素地を養うカリキュラム・マネジメントをするとよい。



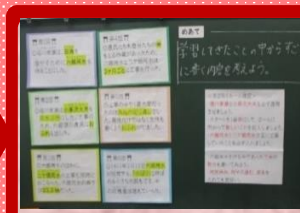
第4学年 社会科

すごろくで学ぼう!六郷用水

令和7年1月21日(火) 授業者:鶴木 祥 【4年2組】
東京都の先人の働きについて、既習事項を振り返り、主体的に問題を解決しようとしている。



発問を受けて児童が本時の目標を意識



既習事項を見直すことができる板書



PCは順序の入力替えや修正が容易



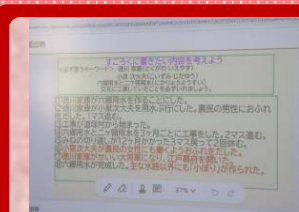
他者参照後には赤色で加筆させた

発問で本時の目標を導く(ファシリテーション)
掲示物を活用して、既習事項を振り返り、本時の目標を問い掛けました。

掲示物の工夫
試行錯誤の途中に活用できる掲示物を導入して提示しました。

ICT等の活用
ICTを活用し、考えを整理し、交流しやすい環境を整えました。

試行錯誤の途中の交流
自由に立ち歩き他者参照して、自分の考えに生かす時間を設けました。



すごろくの項目を意図的に全体交流



全体で発表しての振り返り

協働的な学び
多様な考えに触れることができるよう、担任が意図的に指名しました。

振り返りの充実
言葉で振り返らせ、本時の学習を価値付けました。

授業者自評

■単元を通して、時間をかけて既習事項を積み重ねてきた。■教材研究の段階で、すごろくのマスに書ける社会的事象を授業者自身が書いてみて、児童にとって可能な個数の目安を示した。■協働的な学びなど、更に工夫できる点もあった。

参観者からの意見

■前時までの復習ができていて、既習事項を活用してすごろくをつくることができていた。■ICTを活用した学習活動に集中していた。■交流の時間には、視点を示すとよい。■教員による評価だけでなく、児童同士の相互評価の機会も設けるとよい。

指導講評 大田区教育委員会事務局指導課 統括指導主事 秋山 亮 様

■ファシリテーションを意識し、発問から本時の目標を決めていてよかった。他にも、あえて答えずに切り返すことも有効である。■赤色で加筆させたことで、児童の学びの調整を教員が見取ることができて有効だった。■考えの共有から自己調整につなげたい。



児童の実態把握及び検証

7月・12月の児童アンケート結果・考察

★ 次年度への課題



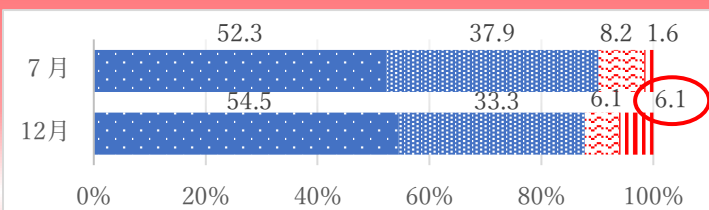
成果と課題

●成果 ▲課題

もち味（よさ）を生かして挑戦している。



地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う。

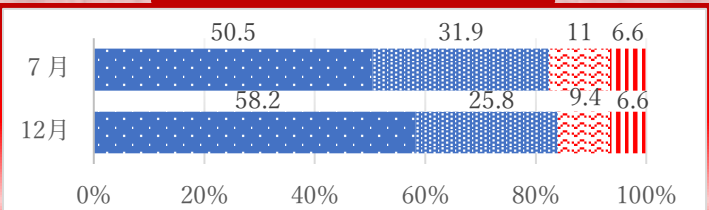


「あてはまらない」が4.5ポイント増の6.1%。もち味（よさ）が見つけられないのか、生かして挑戦できていないのか。教員が児童のよさやもち味を見取り、認め、授業中のファシリテーションに生かしていきます。



地域や社会に対する興味が高いことは、東蒲小の児童のもち味（よさ）として今後も全校で大切にしていきたい点だと分かりました。おおたの未来づくりの「地域の創生」の学習につながります。

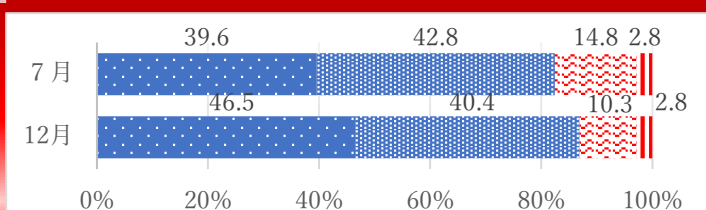
自分にはよいところがあると思う。



肯定的な回答が1.6ポイントと微増。自己肯定感の低い児童に関して一人一人を把握し、もち味を生かして活躍する場の設定や、肯定的な声掛けの継続など丁寧な対応を続ける必要があります。

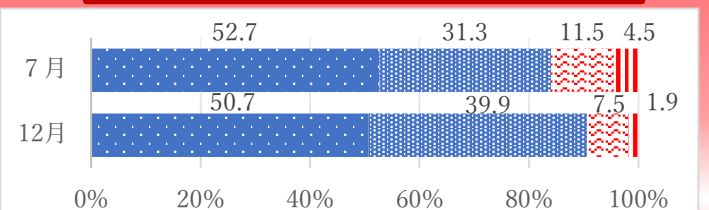


授業では、課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組んだ。



肯定的な回答が4.5ポイント増加しました。教員が、児童主体の授業スタイルを意図的に増やした成果といえます。否定的な回答が13.1%なので、この層に焦点を当て、引き続き授業改善に取り組みます。

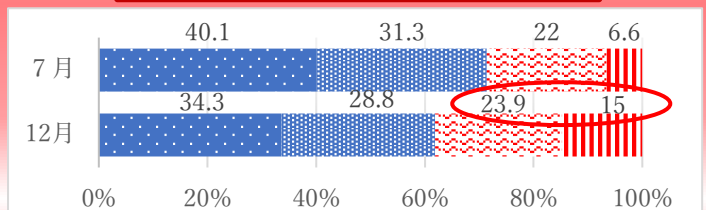
友達と話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。



肯定的な回答が6.6ポイント増加し、割合も9割を超えています。授業の中で、ペアやグループでの話し合い、交流活動などの協働的な学びを積極的に取り入れた成果が出ていると考えられます。



タブレット端末で情報を収集し、自分の考えをまとめ、発表することができる。



7月に比べて12月は否定的な回答が10.3ポイント増加し、割合も他の項目に比べて38.9%と大きい。一斉授業スタイルから、デジタル学習基盤を生かした新しい授業スタイルへの一層の転換が必要だと考えます。

おおた教育ビジョンの成果指標に連動した児童アンケート項目

- Q1 地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う。
- Q2 将来の夢や目標をもっている。
- Q3 授業では、課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組んだ。
- Q4 タブレット端末で情報を収集し、自分の考えをまとめ、発表することができる。
- Q5 将来、積極的に英語を使うような生活をしたり、職業に就いたりしたいと思う。
- Q6 自分にはよいところがあると思う。
- Q7 運動をもっとしたい。
- Q8 学校に行くのは楽しいと思う。
- Q9 友達と話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。
- Q10 学校の授業はよくわかる。
- Q11 先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う。
- Q12 先生は、授業やテストで間違えたところや理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思う。
- Q13 困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる。
- Q14 もち味（よさ）を生かして挑戦している。

■ あてはまる ■ どちらかといえばあてはまる
■ どちらかといえばあてはまらない ■ あてはまらない

※第1学年は12月のみ実施

14項目のうち、研究に関わる6項目を抽出



児童の挑戦

- 答えのない課題に向かって、児童が生き生きと目を輝かせて活動していた。
- 学校評価（保護者アンケート）によると、「ご自分のお子さんは、もち味を生かして、挑戦していると思う」で肯定的な評価が95.6%であった。
- 地域の人と関わりながら学ぶことができた。
- 費用対効果や時間対効果、実現可能性など、多様な視点で教科等横断的に思考を働かせることができた。
- 未来に必要な力を高めていると実感する声が増えた。
- ▲ 今後も自己肯定感が更に高まるように指導を工夫し、成長の実感をもつことができるようにする必要がある。
- ▲ 前頁の児童アンケートより、2つの課題が明らかになった。更に詳細に分析し、次年度への課題として引き継ぐ。

教員の挑戦

- 地域の特徴を生かした本校ならではの単元を開発することができた。
- 総合的な学習の時間や行事で以前からつながりのあった皆様との人脈を活用することができた。
- 授業パートナーとの連携を継続することができた。次年度も引き続き連携を図っていく。
- 全校での取組となるように、指導の手だてや、重点的に育成を目指す創造的な資質・能力の素地を全校で統一して研究を進めることができた。
- ▲ 学びの価値を校内で共有し、全教員が「おおたの未来づくり」の指導及び創造的な資質・能力の素地の育成ができるようにする必要がある。

おおたの未来づくり

Challenge

研究を通して学校をよりよく変える

Well-being

児童も教員も もち味を生かして挑戦する学校へ

児童の挑戦

- 第5学年対象のアンケート（1月実施）では、「6年生になっても教科担任制を続けてほしいですか？」に、92.6%の児童が肯定的な回答をした。
- 児童は4月当初から制度に順応していた。「先生の負担も減るし、それぞれの先生がやる教科がすごく分かりやすかった。」「いろいろな先生とコミュニケーションがとれて楽しい。」という意見が児童から出た。
- 「教科担任制の経験は中学校への進学に役立つと思いますか？」に第6学年全員が肯定的な回答をした。
- 小学生駅伝大会では、13大会のうち過去最高9位。
- ▲ 特別支援教室に通える時間の選択肢が限られた。学級担任の授業時間に通うと、週3時間の体育のうちの2時間に参加できないといった問題が生じた。学級担任の授業にも参加できるように、国語、算数、社会、体育の時間にバランスよく通えるように調整した。

教員の挑戦

- 教科担任制の導入や専科の時間講師の増員で、補教や校務分掌などに余裕が生まれた。
- 毎月の教科担任制等推進委員会で、児童の学習上・生活上の情報共有が十分でき、教員の同僚性も高まった。
- 教科担任制による空き時間の増加によって生まれた時間を活用し、授業パートナーと打合せができた。
- 学校評価（保護者アンケート）によると、「学校は、校内研究や校内研修を通して、教師の授業力向上に努めている」で肯定的な評価が100%であった。
- ▲ 徐々に教員が制度に慣れていったが、正直、小規模校でのメリットをなかなか見いだせず、苦しかった。
- ▲ 学級担任の授業が少ない日に、児童に生活指導をする時間をスキマ時間を工夫して設ける。
- ▲ 健診の引率など、学級担任が全てを担えなくなったので、教科担任や専科が分担して担う部分が増えた。

教科担任制